

熊谷次郎先生のご退職に当たって

経済学部長 梅本哲世

熊谷次郎先生は、2008年3月末をもって桃山学院大学を定年退職されます。『経済経営論集』の本号は、先生のご退職を記念して発行されるものです。

先生は、1972年3月早稲田大学大学院経済学研究科博士課程を単位取得満期退学された後、同年4月、北海学園大学経済学部へ赴任され、さらに、1976年4月に桃山学院大学経済学部へ助教授として着任されました（経済学学担当）。1980年に教授になられ、通算して32年間の長期にわたり本学の教育・研究に携わってこられました。

その間、1984年に経済学部長（任期2年）に就任され、その後も、総合研究所長（1991年度から2年間）、付属図書館長（1996年度、および2003年度から各2年間）、大学院経済学研究科長（2001年度から2年間）、および法人評議員などの役職を歴任されました。先生が桃山学院大学に来られた時期は、本学がその基盤を固めて本格的に発展の道を歩み始めた頃であり、先生はその中心となって本学の発展に寄与されてきました。

先生の経済学部における主担当科目は「経済学史」であり、イギリスのマンチェスター派の経済思想史を中心に研究をされ、主著として『マンチェスター派経済思想史研究』（日本経済評論社、1991年）、『イギリス綿業自由貿易論史』（ミネルヴァ書房、1995年）などがあります。その延長線上で、徳富蘇峰や田口卯吉についても書いておられます。学会活動においても、経済学史学会をはじめとして、主導的な役割を担ってこられました。

先生とは専門分野としては「歴史」を扱うという点で比較的近いにもかかわらず、教えを受ける機会が少なかったことが、いまから思うと残念でなり

ません。一回だけ研究会で一緒したことがありました。1998年11月に熊谷先生が中心になって「A.N.ポーター教授を囲む研究会」が総合研究所で行われたとき、研究会と夕食会に参加しました。ポーター教授のお話を聞き、19世紀中頃のイギリスの対外政策と幕末日本の「植民地化の危機」の関連を質問する際に、英語が全く話せない私は、通訳を熊谷先生にお願いした記憶があります。「自由貿易帝国主義」と幕末・明治の日本の関係について、もう少し先生と議論をしたかったと今更ながら思っています。

本年1月28日に先生は最終講義をされましたが、そこで本学の理念である「世界市民」のもつ歴史的意味について話されました。その広い歴史知識と深い批判的精神に、受講者一同大きな感銘を受けたものです。先生は、マンチェスター派の経済思想について書かれたご著書のなかで、「集権的・国権的体制に妥協しない強靱な個人主義」、「公平の追求は個人の自由の犠牲のうえになされてはならない」という思想に深い共感を表明されています。教授会でのご発言や、教職員・学生との対応でも、この立場を終始貫かれたのではないかと感じています。

私たち経済学部の教員は、定年とはいえ先生が去られることが残念でなりません。どうか今後とも健康にご留意いただき、一層のご活躍をなさいますようお願いいたします。また、これからも変わらぬご指導をいただきますようお願い申し上げます。